ローゼンツヴァイクの〈新しい思考〉とスピノザ

佐藤貴史（北海学園大学）

　20世紀初頭のドイツにおけるスピノザ論は、研究史に残るすぐれた解釈であると同時に時代を映す鏡の役割を果たしていた。すぐに思いつくのはヘルマン・コーエンとレオ・シュトラウスのスピノザ論であろうか。これに対して、この二人のユダヤ人思想家と深い関係にありながら、スピノザに関して多くを語らないように見えるのがフランツ・ローゼンツヴァイクである。

　しかし、ローゼンツヴァイクのテクスト群のなかにはスピノザに対する切れ切れではあるが、何らかの接触を確認することができる。たとえば、『救済の星』第二部の啓示論には個々の魂への神の愛の「スピノザ主義的な否認」や「神の新しい異教主義的・スピノザ主義的な隠れ」という表現がある。批判的な内容であることは確かだが、同時にローゼンツヴァイクはみずからの〈新しい思考〉を一つの「哲学体系」、そして『救済の星』の第一部を「異教の哲学」とまで呼んでいた。そうであればローゼンツヴァイクの「哲学体系」はスピノザやスピノザ主義――新しい異教？――に賛同を示すことはなくても、それを黙殺することはできなかったはずである。さらに言えば、ユダヤ教の刻印を帯びたかれの〈新しい思考〉が「聖書の啓示への無条件の回帰」（シュトラウス）を果たすことはできないと判断されたのは、スピノザの哲学が準備した時代のなかでこそ誕生した思想だったからではないだろうか。本発表では、このような問いについて考えてみたい。